

第I部 総論 引用文献

著者	安中 章夫
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	地域研究シリーズ
シリーズ番号	6
雑誌名	東南アジア--政治・社会
ページ	35-46
発行年	1993
出版者	アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00031190

〔引用文献〕

- [1] 青木保『『ブン』と形式——タイ仏教理解のための一試論——』（『アジア経済』第15巻第7号，1974年7月，2～23ページ）。
- [2] 赤木攻「タイ国の法体系に関する一考察——伝統法体系の存続——」（I）（II）（『東南アジア研究』第13巻第3号，1975年12月，441～454ページ；第13巻第4号，1976年3月，588～601ページ）。
- [3] 赤木攻「タイにおける“コミュニティー”の政治学」（『アジア経済』第21巻第2号，1980年2月，32～56ページ）。
- [4] 浅野幸穂「エルピディオ・キリノ——冷戦期アジア指導者の肖像——」（I）（II）（『アジアトレンド』第13号，1980年冬，85～99ページ；第14号，1981年春，70～85ページ）。
- [5] 浅野幸穂「フク団の性格」（I）（II）（『アジアトレンド』第16号，1981年秋，88～103ページ；第17号，1981年冬，70～85ページ）。
- [6] 浅野幸穂・福島光丘編『アキノのフィリピン——混乱から再生へ——』調査研究レポート11，アジア経済研究所，1988年。
- [7] 綾部恒雄「タイおよびラオスの村落生活——San Pa Tun（タイ）とPha Khao（ラオス）の比較上の覚書」（松本信広編『インドシナ研究——第一次東南アジア稲作民族文化総合調査団報告(1)』有隣堂，1965年，389～504ページ）。
- [8] 綾部恒雄『タイ族——その社会と文化——』弘文堂，1971年。
- [9] 飯島茂『カレン族の社会文化変容——タイ国における国民形成の底辺——』創文社，1975年。
- [10] 池端雪浦「フィリピン民族史の主体的構成」（『アジア研究』第14巻第3号，1967年10月，31～55ページ）。
- [11] 池端雪浦「フィリピンにおける日本軍政の一考察——リカルテ將軍の役割をめぐって——」（『アジア研究』第22巻第2号，1975年7月，40～74ページ）。
- [12] 池端雪浦『フィリピン革命とカトリシズム』勁草書房，1987年。
- [13] 池端雪浦・生田滋『東南アジア現代史II——フィリピン，マレーシア，シンガポール——』山川出版社，1978年。
- [14] 石井米雄『上座部仏教の政治社会学』創文社，1975年。
- [15] 石井米雄『インドシナ文明の世界』講談社，1977年。
- [16] 石井米雄編『タイ国——ひとつの稲作社会——』創文社，1975年。
- [17] 石井米雄編『東南アジア世界の構造と変容』創文社，1986年。
- [18] 石田雄・長井信一編『インドネシアの権力構造とイデオロギー』研究参考資料145，アジア経済研究所，1969年。

- [19] 板垣與一「マライ・ナショナリズムの展開過程」(『一橋論叢』第27巻第2号, 1952年2月, 47~78ページ)。
- [20] Itagaki, Yoichi, "Cutlines of Japanese Policy in Indonesia and Malaya during the War with Special Reference to Nationalism of Respective Countries," *The Annals of the Hitotsubashi Academy*, 第2巻第2号, 1952年3月, 183~192ページ。
- [21] 板垣與一『欧米の東南アジア研究』アジア経済研究シリーズ12, アジア経済研究所, 1961年。
- [22] 板垣與一『アジアの民族主義と経済発展——東南アジア近代化の起点——』東洋経済新報社, 1962年。
- [23] 板垣與一「マラヤ複合社会におけるナショナリズムの発展」(『一橋大学研究年報経済学研究』第6号, 1962年3月, 1~54ページ)。
- [24] 板垣與一編『インドネシアの政治社会構造』調査研究報告双書13, アジア経済研究所, 1961年。
- [25] 市川健二郎『タイの近代化と権力構造』研究参考資料112, アジア経済研究所, 1966年。
- [26] 市川健二郎『日本占領下タイの抗日運動——自由タイの指導者たち——』勁草書房, 1987年。
- [27] 今川瑛一『メコンとイラワジの間——インドシナ半島中央部の現実——』アジアを見る眼14, アジア経済研究所, 1967年。
- [28] 今川瑛一『ネ・ウィン軍政下のビルマ』アジア評論社, 1971年。
- [29] 今川瑛一『アメリカ大統領のアジア政策——反共の苦き勝利——』アジア現代史シリーズ1, アジア経済研究所, 1990年。
- [30] 今堀誠二『マラヤの華僑社会』研究参考資料198, アジア経済研究所, 1973年。
- [31] 岩崎育夫「シンガポールの政治体制」([132] 所収, 105~134ページ)。
- [32] 岩崎育夫「シンガポールの政治指導者」(『アジア経済』第29巻第2号, 1988年2月, 2~24ページ)。
- [33] 岩田慶治「パ・タン村——北部ラオスにおける村落社会の構造」(松本信宏編『第一次東南アジア稲作民族文化総合調査団報告(1)』有隣堂, 1965年, 267~388ページ)。
- [34] 岩田慶治『東南アジアのこころ——民族の生活と意見——』アジアを見る眼30, アジア経済研究所, 1969年。
- [35] 岩田慶治「タイ・ラオスにおける農民の価値意識」(高橋保編『東南アジアの価値意識(下)』研究参考資料247, アジア経済研究所, 1976年, 71~114ページ)。
- [36] 岩武照彦『南方軍政下の経済施策——マライ, スマトラ, ジャワの記録——』

- 汲古書院, 1981年。
- [37] 岩武照彦『南方軍政論集』巖南堂書店, 1989年。
- [38] 宇野円空『マライシアの稲米儀礼』日光書院, 1944年。
- [39] 内田直作『東南アジア華僑の社会と経済』千倉書房, 1982年。
- [40] 梅沢達雄「スハルト政権の経済建設と『新秩序』体制」(I) (II) (『アジア経済』第22巻第7号, 1981年7月, 43~77ページ; 第22巻第8号, 1981年8月, 76~98ページ)。
- [41] 大川周明『近世欧羅巴植民地1』慶應書房, 1941年。
- [42] 太田常蔵『ビルマにおける日本軍政史の研究』吉川弘文館, 1967年。
- [43] Ohno, Takushi, *Philippine-Japan Relations, 1945-1956: War Reparations Question and Peace Settlement*, マニラ, University of the Philippines, 1975年。
- [44] 大野徹「ビルマにおけるカレン民族の独立闘争史」(1)(2)(3) (『東南アジア研究』第7巻第3号, 1969年12月, 363~390ページ; 第7巻第4号, 1970年3月, 546~570ページ; 第8巻第1号, 1970年6月, 64~90ページ)。
- [45] 大野徹「ビルマ国軍史」(1)(2)(3) (『東南アジア研究』第8巻第2号, 1970年9月, 218~251ページ; 第8巻第3号, 1970年12月, 347~377ページ; 第8巻第4号, 1971年3月, 534~569ページ)。
- [46] 岡部達味「シンガポール華人と中国」(『アジア経済』第9巻第4号, 1968年4月, 14~37ページ)。
- [47] 岡部達味編『ASEANをめぐる国際関係』日本国際問題研究所, 1977年。
- [48] 岡部達味編『ASEANの20年——その持続と発展——』日本国際問題研究所, 1987年。
- [49] 岡部達味編『ASEANにおける国民統合と地域統合』日本国際問題研究所, 1989年。
- [50] 小沼新「ホー・チ・ミン——その思想と行動——」(日本国際政治学会編『第三世界政治家研究』有斐閣, 1977年, 61~81ページ)。
- [51] 小沼新『ベトナム民族解放運動史——ベトミンから解放戦線へ——』法律文化社, 1988年。
- [52] Kato, Tsuyoshi, *Matriliney and Migration: Evolving Minangkabau Traditions in Indonesia*, イサカ, Cornell University Press, 1982年。
- [53] 河部利夫「華僑社会の問題」(アジア政経学会編『中国政治経済綜覧』アジア政経学会, 1963年, 888~897ページ)。
- [54] 河部利夫「タイ現代政治の権力構造の動態」(山本達郎編『東南アジアにおける権力構造の史的考察』竹内書店, 1965年, 173~202ページ)。
- [55] 河部利夫編『東南アジア華僑社会変動論』研究参考資料183, アジア経済研究所, 1972年。

- [56] 菊地靖『フィリピンの社会人類学——双系性をめぐる諸問題——』敬文堂、1980年。
- [57] 岸幸一「インドネシアにおける近代化と地域主義——南スラヴェシのケース・スタディ」(I) (II) (『アジア経済』第6巻第8号, 1965年8月, 14~27ページ; 第6巻第10号, 1965年10月, 14~28ページ)。
- [58] 岸幸一「インドネシアの国民国家の形成における慣習首長の地位と役割」(『アジア経済』第8巻第6号, 1967年6月, 17~27ページ)。
- [59] 岸幸一・馬淵東一編『インドネシアの社会構造』アジア経済調査研究双書172, アジア経済研究所, 1969年。
- [60] 北原淳編『東南アジアの社会学——家族・農村・都市——』世界思想社, 1989年。
- [61] 木村哲三郎『ベトナムの国際関係と経済発展』研究双書359, アジア経済研究所, 1987年。
- [62] 木村宏恒「インドネシアの開発と軍・官僚国家再論」(『熊本法学』第49号, 1986年11月, 41~79ページ)。
- [63] 木村宏恒『インドネシア 現代政治の構造』三一書房, 1989年。
- [64] 桐生稔『ビルマ式社会主義』教育社, 1979年。
- [65] 具島兼三郎『インドシナの民族革命』潮流社, 1949年。
- [66] 口羽益生・坪内良博・前田成文『マレー農村の研究』創文社, 1976年。
- [67] 倉沢愛子「日本軍政下のジャワにおける米穀流通政策」(『アジア経済』第21巻第11号, 1980年11月, 2~23ページ)。
- [68] 倉沢愛子「ジャワの村落における社会変容の一考察——日本軍政下の榊供出制度とその影響——」(『東南アジア研究』第19巻第1号, 1981年6月, 77~105ページ)。
- [69] 黒柳米司「スハルト『新体制』の体質と展望」(『国際年報・1969年』第11巻, 日本国際問題研究所, 1973年, 296~320ページ)。
- [70] 高坂正堯「東南アジアの国際関係に関する一仮説」(日本国際政治学会編『開発途上国の政治社会構造』有斐閣, 1967年, 68~84ページ)。
- [71] 合田濤『首狩りと言霊——フィリピン・ボントック族の社会構造と世界観——』弘文堂, 1989年。
- [72] 後藤乾一『火の海の墓標——ある「アジア主義者」の流転と帰結——』時事通信社, 1977年。
- [73] 後藤乾一『昭和期日本とインドネシア——1930年代「南進」の論理・「日本観」の系譜——』勁草書房, 1986年。
- [74] 小林良正『インドネシア独立のための闘争』潮流社, 1949年。
- [75] 佐久間平善『ビルマ現代政治史』勁草書房, 1984年。
- [76] 桜井由躬雄『ベトナム村落の形成——村落共有田=コンディエン制の史的

- 展開——』創文社，1987年。
- [77] 桜井由躬雄・石沢良昭『東南アジア現代史III ヴェトナム・カンボジア・ラオス』山川出版社，1977年。
- [78] 佐々木徹郎『コミュニティ・デベロプメントの研究』お茶の水書房，1982年。
- [79] 佐藤宏・近藤則夫『インド・マレーシアの社会変動と国家官僚制——政治化，専門化と国民統合——』経済協力シリーズ125，アジア経済研究所，1986年。
- [80] 信夫清三郎『ラッフルズ——イギリス近代的植民政策の形成と東洋社会——』日本評論社，1941年。
- [81] 信夫清三郎『「太平洋戦争」と「もう一つの太平洋戦争」——第二次大戦における日本と東南アジア——』勁草書房，1988年。
- [82] 清水元「ゴー・ディン・ジュムにおけるパーソナリズムの理想と現実」（高橋保編『東南アジアの価値意識(下)』研究参考資料247，アジア経済研究所，1976年，43～70ページ）。
- [83] 白石愛子「日本軍政期におけるスマトラの義勇軍」（『アジア経済』第18巻第3号，1977年3月，24～44ページ）。
- [84] 白石隆「初期イスラム同盟（1912-17年）」（I）（II）（『アジア経済』第22巻第7号，1981年7月，21～42ページ；第22巻第8号，1981年8月，51～75ページ）。
- [85] 白石隆「ASEAN諸国の政治的安定度」（高坂正堯編『アジアで政治協力は可能か』人間の科学社，1987年，175～202ページ）。
- [86] Shiraisi, Masaya, “Phan Bôi Châu and Japan”（『東南アジア研究』第13巻第3号，1975年12月，427～440ページ）。
- [87] 白石昌也「開明的知識人層の形成——20世紀初頭のベトナム——」（『東南アジア研究』第13巻第4号，1976年3月，559～579ページ）。
- [88] 白石昌也「疆底の国外退去をめぐって——在日ベトナム人東遊運動の終焉——」（『南方文化』第14号，1987年11月，1～48ページ）。
- [89] 鈴木祐司『東南アジアの危機の構造』勁草書房，1982年。
- [90] 首藤素子「『インドネシア』成立時の国際環境研究(1)——1946年における外交交渉の経緯と問題点について——」（『政治学論集』〈駒沢大学法学部〉第19号，1984年3月，37～67ページ）。
- [91] 首藤素子「『インドネシア』成立時の国際環境研究(完)」（『政治学論集』〈駒沢大学法学部〉第25号，1987年3月，25～66ページ）。
- [92] 高橋保「カンボジアにおけるベトナム人問題の現状と歴史的背景——インドシナにおける民族的相剋の一側面——」（『アジア経済』第12巻第2号，1971年2月，31～59ページ）。

- [93] 高橋保「ベトナムにおけるナショナリズムの展開と土着宗教——カオダイ教およびホアハオ教について——」（高橋保編『東南アジアのナショナリズムと宗教』研究参考資料207, アジア経済研究所, 1973年, 1~54ページ）。
- [94] 高橋保「ノロドム・シアヌークにおける政治意識と行動」（高橋保編『東南アジアの価値意識(上)』研究参考資料225, アジア経済研究所, 1974年, 41~86ページ）。
- [95] 高橋保「プノンペン撤退後の民主カンボジア：1979—1984」（『国際大学大学院国際関係学研究所研究紀要』第4号, 1985年12月, 1~26ページ）。
- [96] 竹村卓二『ヤオ族の歴史と文化——華南・東南アジア山地民族の社会人類学的研究——』弘文堂, 1981年。
- [97] 田中忠治『新タイ事情』（上）（下）日中出版, 1981年。
- [98] 田中宏編『日本軍政とアジアの民族運動』研究双書316, アジア経済研究所, 1983年。
- [99] 田辺寿夫「ビルマ民族主義の流れと日本」（長崎暢子編『南アジアの民族運動と日本』研究参考資料288, アジア経済研究所, 1980年, 131~144ページ）。
- [100] 田辺寿夫「日本軍政下におけるビルマ左翼の軌跡」（[98]所収, 81~98ページ）。
- [101] 谷川榮彦『東南アジア民族解放運動史——太平洋戦争まで——』勁草書房, 1969年。
- [102] 谷川榮彦「太平洋戦争と東南アジア民族独立運動」（『法政研究』第53巻第3号, 1987年3月, 361~398ページ）。
- [103] 谷川榮彦編『ベトナム戦争の起源』勁草書房, 1984年。
- [104] 土屋健治「スカルノとハッタの論争」（『東南アジア研究』第9巻第1号, 1971年6月, 61~88ページ）。
- [105] 土屋健治「スカルノとイスラム（1934~1942年）」（『東南アジア研究』第9巻第4号, 1972年3月, 577~596ページ）。
- [106] 土屋健治『インドネシア民族主義研究——タマン・シスワの成立と展開——』創文社, 1982年。
- [107] 坪内良博・坪内玲子『離婚——比較社会学的研究——』創文社, 1970年。
- [108] 坪内良博・前田成文『核家族再考』弘文堂, 1977年。
- [109] 鶴見良行『マラッカ物語』時事通信社, 1981年。
- [110] 富沢寿男「ジョホール首長の即位儀礼——マレー半島, ヌグリ・スンビランにおける伝統的権威の存立基盤をめぐって——」（『東洋文化研究所紀要』第100冊, 1986年3月, 63~99ページ）。
- [111] 富永健一「低開発社会の産業化と社会変動——タイの事例を手がかりとして——」（『日本労働協会雑誌』第10巻第4号, 1968年, 2~29ページ）。
- [112] 中川剛『海洋型アジア文化の基層』勁草書房, 1983年。

- [113] 中野秀一郎「現代マレーシアにおける政治的リーダーシップの史的特性分析——政治エリートの分析を通じてみたマレーシア政権の特性——」(『東南アジア研究』第15巻第2号, 1977年9月, 153~177ページ)。
- [114] Nakamura, Mitsuo, "The Radical Traditionalism of the Nahdlatul Ulama in Indonesia" (『東南アジア研究』第19巻第2号, 1981年9月, 187~204ページ)。
- [115] Nakamura, Mitsuo, *The Crescent Arises over the Banyan Tree*, ヨクヤカルタ, Gajah Mada University Press, 1983年。
- [116] 長井信一「東南アジア地域研究の歴史的側面に関する覚え書き——マラヤ・インドネシアを中心として——」(『アジア経済』第2巻第2号, 1961年3月, 42~46ページ)。
- [117] 長井信一「マラヤの政党指導者：マレー系を中心とする一つの仮説的試み」(『アジア経済』第6巻第6号, 1965年6月, 2~15ページ)。
- [118] 長井信一『現代マレーシア政治研究』アジア経済調査研究双書241, アジア経済研究所, 1978年。
- [119] 永積昭『オランダ東インド会社』近藤出版社, 1971年。
- [120] 永積昭『東南アジアの歴史——モンスーンの風土——』講談社, 1972年。
- [121] Nagazumi, Akira, *The Dawn of Indonesian Nationalism: The Early Years of the Budi Utomo, 1908~1918*, I.D.E. Occasional Papers Series 7, 東京, I.D.E., 1972年。
- [122] 永積昭『アジアの多島海』講談社, 1977年。
- [123] 永積昭『インドネシア民族意識の形成』東京大学出版会, 1980年。
- [124] Nishihara, Masashi, *Golkar and the Indonesian Elections of 1971*, イサカ, Cornell University, 1972年。
- [125] Nishihara, Masashi, *The Japanese and Sukarno's Indonesia: Tokyo-Jakarta Relations, 1951~1966*, ホノルル, The University Press of Hawaii, 1975年。
- [126] 西原正「東南アジアにおける戦略的バランス」(高坂正堯編『アジアで政治協力は可能か』人間の科学社, 1987年, 71~96ページ)。
- [127] 日本国際問題研究所インドネシア部会編『インドネシア資料集 1945~1867』(全2巻), 日本国際問題研究所, 1973年。
- [128] 野畑健太郎「一党制の権力確立の過程：シンガポールの場合——憲法および憲法現象を通じての考察——」(『早稲田政治公法研究』第12号, 1983年12月, 284~299ページ)。
- [129] 萩原宜之「マラヤのコミュニナリズムと国民的統合」(『国際政治』第36号, 1968年4月, 27~44ページ)。
- [130] 萩原宜之『ASEAN=東南アジア諸国連合』有斐閣, 1983年。

- [131] 萩原宜之『マレーシア政治論——複合社会の政治力学——』弘文堂，1989年。
- [132] 萩原宜之・村嶋英治編『ASEAN諸国の政治体制』研究双書357，アジア経済研究所，1987年。
- [133] 橋本裕子「バンコクのスラム——貧困がもたらす停滞と移動者がもたらす社会不安——」（『アジア経済』第25巻第4号，1984年4月，63～86ページ）。
- [134] 原かおり・新田目夏実「マニラのスラム——向上意欲の高いスラム住民——」（『アジア経済』第25巻第4号，1984年4月，111～131ページ）。
- [135] 原不二夫「マラヤ共産党と抗日戦争」（『アジア経済』第19巻第8号，1978年8月，2～27ページ）。
- [136] 原不二夫「中国の華僑政策とマレーシア華人」（坂本義和・松本繁一編『変動するアジア国際政治』研究双書325，アジア経済研究所，1984年，221～254ページ）。
- [137] 原不二夫「戦後マラヤの愛国華僑」（Ⅰ）（Ⅱ）（『アジア経済』第27巻第1号，1986年1月，2～17ページ；第27巻第2号，1986年2月，17～25ページ）。
- [138] 原不二夫『英領マラヤの日本人』研究双書347，アジア経済研究所，1986年。
- [139] 林行夫「モータムと『呪術的仏教』——東北タイ・ドンデーン村におけるクン・プラタム信仰を中心に——」（『アジア経済』第25巻第10号，1984年10月，77～98ページ）。
- [140] 林行夫「東北タイ・ドンデーン村——葬儀をめぐるブン（功德）と社会関係——」（『東南アジア研究』第23巻第3号，1985年12月，349～370ページ）。
- [141] 林行夫「ダルマの力と帰依者たち——東北タイにおける仏教とモータム——」（『国立民族学博物館研究報告』第14巻第1号，1989年7月，1～116ページ）。
- [142] 深見純生「成立期イスラム同盟に関する研究——イスラム商業同盟からイスラム同盟へ——」（『南方文化』第2輯，1975年9月，111～127ページ）。
- [143] 深見純生「初期イスラム同盟（1911～16）に関する研究」（1）（2）（『南方文化』第3輯，1976年10月，117～146ページ；第4輯，1977年7月，151～182ページ）。
- [144] 福島光丘「フィリピンの対外政策」（今川瑛一編『70年代アジアの国際関係』研究参考資料283，アジア経済研究所，1980年，181～206ページ）。
- [145] 藤原帰一「フィリピンの政治制度」（萩原宜之・村嶋英治編『ASEAN諸国の政治体制』研究双書357，アジア経済研究所，1987年，85～104ページ）。
- [146] 藤原帰一「フィリピンにおける『民主主義』の制度と運動」（『社会科学研究』〈東京大学社会科学研究所紀要〉第40巻第1号，1988年7月，1～94ページ）。
- [147] 古田元夫「インドシナ共産党から三つの党へ——1948～51年のベトナム共産

- 主義者の対カンボジア・ラオス政策——」（『アジア研究』第29巻第4号，1983年1月，42～78ページ）。
- [148] 古田元夫「ベトナム——インドシナの民族的諸相——エスニシティー論の視点から——」（『東洋文化』第64号，1984年3月，45～86ページ）。
- [149] 古田元夫「ベトナムの対ASEAN政策——タイとの関係を中心に——」（坂本義和・松本繁一編『変動するアジア国際政治』研究双書325，アジア経済研究所，1984年，191～220ページ）。
- [150] 前田成文（岩田慶治等監修）『東南アジアの組織原理』勁草書房，1989年。
- [151] 間苧谷栄「インドネシアにおける宗教と国家——スカルノ＝ナシール論争とその背景——」（高橋保編『東南アジアのナショナリズムと宗教』研究参考資料207，アジア経済研究所，1973年，133～174ページ）。
- [152] 間苧谷栄「バリ村落の基本構造」（『アジア経済』第16巻第10号，1975年10月，2～22ページ）。
- [153] 間苧谷栄『現代インドネシア研究』勁草書房，1983年。
- [154] 増田与「太平洋戦争期のインドネシア民族運動」（『歴史学研究』第289号，1964年6月，14～22ページ）。
- [155] 増田与「民族民主革命とプロレタリアートの指導権——インドネシア現代史研究の状況と問題——」（『歴史学研究』第299号，1965年4月，32～36ページ）。
- [156] 増田与『インドネシア現代史』中央公論社，1971年。
- [157] 松岡完『ダレス外交とインドシナ』同文館出版，1988年。
- [158] 馬淵東一『馬淵東一著作集』（全3巻）社会思想社，1974年。
- [159] Mizuno, Koichi, *Social System of Don Daeng Village: A Community Study in Northeast Thailand*, Discussion Paper Nos. 12-22, 東南アジア研究センター，1971年。
- [160] 水野浩一『タイ農村の社会組織』創文社，1981年。
- [161] 宮本勝『ハヌノオ・マンギャン族』第一書房，1986年。
- [162] 村嶋英治「70年代におけるタイ農民運動の展開」（『アジア経済』第21巻第2号，1980年2月，2～31ページ）。
- [163] 村嶋英治「1970年代のタイ国における学生運動と共産主義」（『アジア経済』第23巻第12号，1982年12月，24～49ページ）。
- [164] 村嶋英治「タイ——80年代政治変動の構図——」（『世界』第450号，1983年5月，175～183ページ）。
- [165] 村嶋英治「タイにおける政治体制の周期的転換」（[132]所収，135～190ページ）。
- [166] 森弘之・鈴木恒之・和田久徳『東南アジア現代史 I 総説・インドネシア』山川出版社，1977年。

- [167] 安中章夫「インドネシアの政治指導層に関する基礎統計」(『アジア経済』第8巻第6号, 1967年6月, 85~110ページ)。
- [168] 安中章夫「インドネシア国軍における政治化——その歴史的起点——」(〔18〕所収, 108~130ページ)。
- [169] Yasunaka, Akio, *The Sequences of "Crises" in Indonesia*, I.D.E. Special Papers 11, 東京, I.D.E., 1978年。
- [170] 安中章夫「『新秩序』とは何か——ひとつの接近——」(『伊東定典先生・洪澤元則先生古希記念論集』東京外国語大学インドネシア・マレーシア語学科研究室, 1988年, 29~48ページ)。
- [171] 矢野暢『タイ・ビルマ現代政治史研究』京都大学東南アジア研究センター, 1968年。
- [172] 矢野暢『東南アジア政策——疑いから信頼へ——』サイマル出版会, 1978年。
- [173] 矢野暢『日本の南洋史観』中央公論社, 1979年。
- [174] 矢野暢「国民形成への文化主義的接近——タイ国の政治的統合の論理——」(『年報政治学 1978』1980年, 1~26ページ)。
- [175] 矢野暢『東南アジア世界の論理』中央公論社, 1980年。
- [176] 矢野暢『南北問題の政治学』中央公論社, 1982年。
- [177] 矢野暢『東南アジア世界の構図——政治的生態史観の立場から——』日本放送出版協会, 1984年。
- [178] 矢野暢『冷戦と東南アジア』中央公論社, 1986年。
- [179] 矢野暢編『東南アジア学への招待』日本放送出版協会, 1977年(1982年改訂版(上, 下))。
- [180] 山影進「国民統合のための地域統合——東南アジア島嶼部国際関係の変容と政治統合問題(アジアの民族と国家 東南アジアを中心として)——」(『季刊国際政治』第84号, 1987年2月, 9~26ページ)。
- [181] 山影進「ASEANの本質と活動」(日本国際問題研究所編『日本とASEAN』日本国際問題研究所, 1988年, 127~146ページ)。
- [182] 吉川利治「“アジア主義”者のタイ国進出——明治中期の一局面——」(『東南アジア研究』第16巻第1号, 1978年6月, 78~93ページ)。
- [183] 吉川利治「タイ国ピブーン政権と太平洋戦争」(『東南アジア研究』第19巻第4号, 1982年3月, 363~387ページ)。
- [184] 吉川洋子「フィリピンの政治的正当性の一考察」(『東南アジア研究』第14巻第2号, 1976年9月, 230~269ページ)。
- [185] 吉川洋子「日比賠償外交交渉」(『京都産業大学論集——国際関係系列——』1978年9月~85年3月にかけて連載)。
- [186] 吉川洋子「フィリピンの政治的クライアンテリズム——大統領の任命権と任

- 命の政治過程——」（『東南アジア—歴史と文化』第16号，1987年，37～75ページ）。
- [187] 吉沢南「民主主義とベトナム独立同盟（ベトミン）およびその運動」（『歴史学研究』第386号，1972年7月，36～47ページ）。
- [188] 吉沢南『ハノイで考える』東京大学出版会，1980年。
- [189] 吉沢南『ベトナム——現代史のなかの諸民族——』朝日新聞社，1982年。
- [190] 吉田禎吾「バリ村落の宗教と世界観」（『アジア経済』第16巻第10号，1975年10月，23～39ページ）。
- [191] 吉田幹正「タイの官僚制」（大内穂・下山瑛二編『開発途上国の官僚制と経済発展』研究双書328，アジア経済研究所，1985年，169～192ページ）。
- [192] 早稲田大学大隈記念社会科学研究所編『インドネシアにおける日本軍政の研究』紀伊国屋書店，1959年。
- [193] 綿貫芳源「シンガポール憲法序説」（上）（下）（『自治研究』第58巻第11号，1982年11月，3～13ページ；第58巻第12号，1982年12月，13～24ページ）。

